

みする。14時50分に820mのテント1を通過し、4時に五色温泉のホテルに到着。

午前中に別れた石浦氏は先にホテルへ帰り、入浴を済ませていた。風呂は日本の温泉浴場とよく似た作りで、広くゆったりとしているという。残念ながら私たち登山組は入浴することなく、荷物をまとめすぐにタクシーでカンヌンの空港へ向かい、最終便でソウルへ戻った。そして翌日、富山空港へ到着。

雪岳山の五色温泉から山頂までの植生帯を概観してみると、次のようになる。標高約900mまではアカマツが混交するモンゴリナラ林、標高約900m～1650mまではモンゴリナラとトウシラベ、チョウセンゴヨウが混交する針葉樹-広葉樹混交林、標高約1650m～山頂(1708m)はトウシラベとハイマツの針葉樹林となる。ハイマツの群落はダケカンバやイチイ、トウシラベ、オガラバナなどの低木林に囲まれていた。Song and Nakanishi (1985) は雪岳山の山頂付近のハイマツ群落がイチイと強く結びついていると考え、ハイマツ-イチイ群落と名づけている。富山県立山などのハイマツ群落によく見られるコケモモやガンコウラン、コガネイチゴ、ミツバオウレンなどは見られないことから、かなり異質なハイマツ群落というイメージを持った。

標高約900m～1650mまでの針葉樹-広葉樹混交林は、数日前に視察した中国吉林省の長白山山麓の混交林を比較すると、林冠構成種としてダケカンバやチョウセンゴヨウが出現し、低木層にナナカマドやオガラバナが優占する点で似ているが、林冠にトウヒの仲間 (*Picea*) が優占する点やカラマツ属 (*Larix*) を含む点で異なっていた。シベリアタイガは、高木層にシベリアモミ (*Abies*)

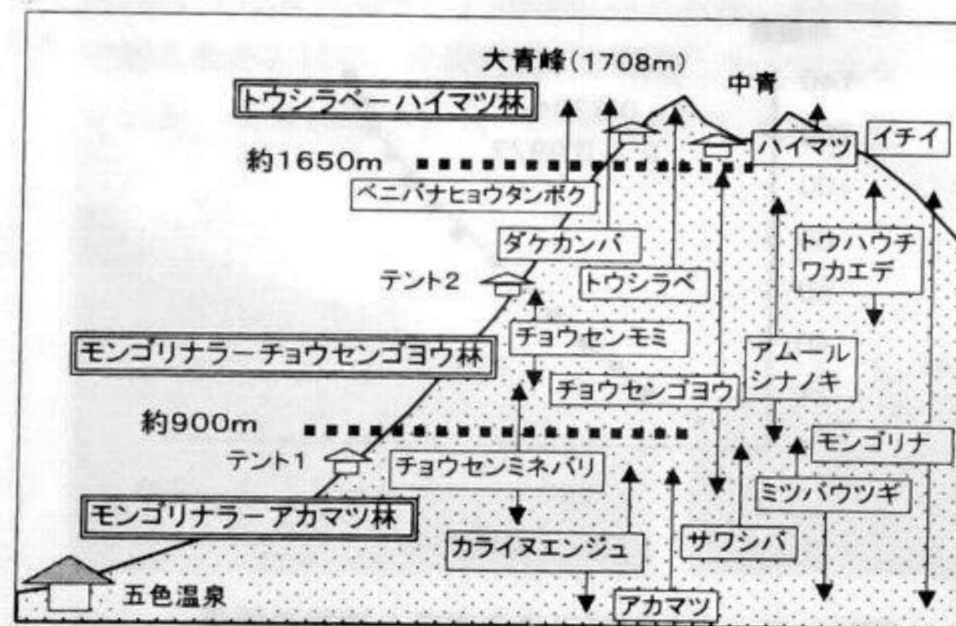


図17 韓国雪岳山の植生帯の垂直分布概略

sibirica)、シベリアトウヒ (*Picea sibirica*)、シベリアゴヨウ (*Pinus sibirica*) が多く見られ、亜高木層や低木層にダケカンバやナナカマド、オガラバナが出現し、崩壊地などの土壌が不安定な場所にハイマツが群落を作っている。シベリアゴヨウの代わりにチョウセンゴヨウが構成要素に入っていると考えると、よく似た森林構造であると思われる。また、ハイマツを含む点を考慮して、思い切って想像を働かせるならば、シベリアタイガのような森林群落が氷河時代に雪岳山に成立し、その後の温暖化によりハイマツを含む針葉樹林が高標高域へ押し上げられ、山頂効果が期待できる山頂付近に残存したと考えられる。しかしこの説には欠点がある。それはシベリアのタイガ中に分布するハイマツ群落では、ハイマツの太い幹が地表から直立し、高さ50～100cmで枝分かれする点や、林床にコケモモやガンコウラン、ツマトリソウ、リンネソウなどが見られる点で雪岳山のハイマツ群落と相違していることである。

最後に雪岳山踏査を含めて、中国・韓国への視察・学術交流を企画され、同行を許していただいた日本海環境サービス株式会社常務取締役舟崎洋一氏に深く感謝申し上げます。また、雪岳山登山の宿泊・移動及び踏査のガイドをしていただいた国民大学校森林科学大学山林資源学科副教授の金恩植博士に心より感謝いたします。またこのレポートをまとめるに当たって立山カルデラ砂防博物館の菊川茂氏には貴重な写真をお借りしたので、ここに感謝の意を表します。

引用文献

- 吉良竜夫. 1948. 温量指数による垂直的な気候帯のわちかたについて. 寒地農学. 2:143-173.
- Song Jung-Suk and Nakanishi, S. 1985. On the *Pinus pumila* scrub of Mt. Sulak, Korea. Jap. J. Ecol. 35: 537-541.
- (2000年12月28日受理)

南の島にワラジムシをさがして-2

布村 昇

富山市科学文化センター 〒939-8084 富山県富山市西中町1-8-31

Short Collecting Trips to the Subtropical Islands-2

Noboru Nunomura

Toyama Science Museum, Nishinakano-machi, 1-8-31, Toyama-shi, Toyama 939-8084, JAPAN

私は日本各地のワラジムシ、ダンゴムシ、フナムシなどの仲間 (等脚目甲殻類) の調査をしてきた。琉球列島からはある程度の新種を発見したが、それらがもう十分というわけではないなあなどと思って昨年は宮古島へ行ったが、本年はもっとも多数の種の生息が予測される西表島に夏季休暇を利用して行く事を思い立ち、夏休みの混雑を避け、しかも梅雨明けの晴れ間、かつ干潮の時期を狙い、7月初めに出かけた。

7月3日、名古屋空港から石垣島までわずか2時間50分のフライトだ。あっという間に奄美上空である。サンゴ礁がくっきり見えた。やがて徳之島、沖永良部島などと数えているうちに沖縄島につく、さすがに、琉球弧ではズバヌケて大きい。宮古島の上に来て、まもなく高度が下がり、着陸体制となる。石垣島では島の北側の川平湾上から空港に着陸するようだ。寒いサンゴ礁が生きていることを感じた。空港に着陸。たまたま元力士の舞の海関が一番前におられ、続いて降りる。やや早く着いたので、一つ前の船に間にあうかもしれないと思い、タクシーを急がせる。棧橋につき、船に走ると数秒前に棧橋を離れたばかり、オーイと叫ぶと再び、棧橋に船を戻してくれた。

西表船浦港につくなり、すぐ前の旅館に荷物を解き、ゴーヤチャンプルー好物だとオバサンに告げ、余計な荷物を置くなり、海岸へ走る。潮が満ちてくるので一刻も早く走る。干潟を見るとキバウミニナがたくさんみられた。一匹を生きたまま瓶に入れてみた。

ついで、陸上に戻り、近くの木の下を探すと、多数のワラジムシがでてきたので、うれしくなってきた。端から吸虫管が泥で詰まってしまう、泥を取るため、逆さに吹いた。それが強すぎてフォルマリン飛び、目にはいつてしまった。岸壁を飛び降り干潟の泥水で目を洗った。しかも、近くには下水の排水溝があったが、きたないなどとは言っておれない。とりあえず目をあけた。幸い旅館が近かったので、走って帰り、十分旅館の水で目を洗った。

その夜、部屋の中でゴトゴトと物音がするが、見まわしても誰もいない。気味悪いと思っていたが、やっと正体をつかんだ。屋に捕まえたキバウミニナが瓶の中で動き出したのだ。それにしても大きな音に驚き、この貝の力に認識を新たにす。翌4日、天気予報は急に悪くなるようだ。でも、あまりにも暑いので窓を空けて風通しをよくし、ちょっと出かける。台風が発生したのである。私はお客様を案内するときは晴れるが、一人の時はどうもだめだ。潜水や磯採集を主体とすることをあきらめ、とにかく近くのレンタカー屋に駆け込む。「西表島で急に言ってもありませんよ。」とたしなめられたが、それでも、何とかありませんかと言いつつ待っていると係員がワイワイ言っている。レンタカーの予約者が時間になっても来ないのである。そしてその1台を借りられることになった。とにかく粘ってみるものである。帰ってみると、部屋が池のように水浸しになっている。凄い雨だ。旅館のおばさんに謝り、雑巾や何年前の古

雑誌などで水を回収。亜熱帯で窓の空けっぱなしは厳禁だ。

いよいよ、雨の中をドライブ。良い道であるが、道路工事のため、片側交互通行やアップダウンの多い道、制限速度は40kmであるが、これは人間の安全と「イリオモテヤマネコ」などの動物の保護のためである。しかし、速度の速い車も有る。へび、かえる、鳥が死んでいる。2m近い大型へび、サキシマスジオの死体もあった。途中スクール状の雨になり、フロントガラスからは何も見えない。やむなく、道路の端によって停車。小一時間待つと小止みになり、ドライブ続行。だんだん道は細くなり、車一台やっと通れるくらいの細い道を行き、南端の南風見田の浜まで行く。幸い、雨がやみ、いつものように吸虫管でワラジムシを吸う。南のものは小型だが足が速い。つづいて、浜に出て、フナムシを追う。これも小型だが俊敏だ。ミクロネシアのフナムシのようにジャンプをしないだけマシであると思った。

7月5日。西表島の大体の様子がわかったので、再度、島の西端の白浜から東南端まで、ワラジムシのいそうなところに車を止め、採集を試みる。空振りもあったが、昨日よりは効率が良い。

途中、古見のサキシマスオウノキに寄る。その板状根はすごい。御獄(うたき)とされて、神聖な場所である。ところが、その一つが倒れ、腐っていた。哀れであったが、キノコが着き、死んでいた。物質循環の巧みさを感じたが、何らかの人間の営為が本来より早い死をもたらしたのではないかなどと考えもした。



図1 古見のサキシマスオウノキ。板根の発達がすごい。

西表野生生物保護センターによる。イリオモテヤマネコの記念館による。骨格標本や写真にまじって、手書きの目撃記録があり、愛着を感じた。

また車を走らせ、北岸の高那の浜に寄る。地形を見ると飛沫帯の岩の割れ目の中に独特の赤いワラジムシの生息の可能性が考えられたからで、そのとおり、採れた。満足して、隣接する浜を歩いてみる。浜辺にはペットボトルがすごく目立つようになった。空き缶よりもずっと多い。場所柄、日本語のものより中国語のものの方が多かった。ハンゲルも結構多い。その中に、死んだオカヤドカリの仲間が詰まって死んでいた。おそらく、観光に来た子供が詰め、そのままにしてしまったのであろう。親がいっしょにいたのであろうに、逃がしてあげるという教育をしなかったのであろうか。

宿に帰る。夕刻、有線放送が流れる。「ハブクラゲに注意！」というのと「水を使いすぎないように大切に使ってほしい。」というものだ。昨日の目の件は仕方ないが、水の豊富な富山県にすむわれわれは顔の洗い方一つにしても水の使い方に節約が足りない。豊富な水というのは稀な恵みなのだあと反省させられる。

7月6日。台風が近くなったことをテレビが伝えていたため、念の為、帰りは早い船にする。しかし、一見波が静かそうであったのに、船浦からは出ず東海岸の大原からということであった。旅館の庭の物置小屋や裏山との境界のゴミをめぐらせてもらう。もちろん、ワラジムシ探しのためだが、思わぬものも見つけた。タイワンサソリモ



図2 西表島北岸に打ちあがっていたペットボトル。いろいろな国からきたことが分かる。

ドキが多い。毒を持たないのに毒を持つサソリとそっくりで、鉗角や尾を持ち上げて、私を威嚇する。虎の威を借る何とかであるが、なんともいじらしい。系統が学上重要な仲間だ。

またオオシマドボタルの幼虫がオキナワウスカワマイマイを襲っているのを目撃した。

船にのると案の定、凄い揺れ。高速船が一回一回、床にたたきつけられるような衝撃を感じつつ、石垣港に着く。飛行機の出発まで、半日の時間ができたので、本数のもっとも多い白保行きにのる。途中磯辺で落ち葉が堆積した場所を見つけたが、「なぜこんなところで降りるのか」と女性のバス運転手から聞かれた。観光客がめったに降りないバス停で本土から来た客らしいので、好奇心で聞いたのだろう。とっさに橋が見えたので、「橋を見に」などと適当なことを言って降りる。

磯部川河口へ行く。猛烈な大群に蚊にさされ、文字通りぼこぼこになった。ここでも、サソリモドキがいた。マングロープの中の泥の中に靴もどろどろになる。そうこうしているうちに、時間が



図3 石垣島磯部川のマンマングローブ。ちょうど満潮だった。

きた。バスで再び、市内に戻り、空港に行った。慌しい4日間の休暇旅行であったが、今年のワラジムシ採集の南島旅行はこの1回で終わり、あとは富山湾に潜っただけであったが、日本の各地のワラジムシの分布から種分化に迫ってみたいと言う夢を追いかけるにはまだまだすべきことが多すぎる。

(2000年12月28日受理)

